研究課題　史料編纂所所蔵維新関係貴重史料の研究資源化

研究経費　二四〇万八二〇円（前年度よりの繰越分を含む）

研究組織

　研究代表者　　　小野将

　所内共同研究者　保谷徹・杉本史子・箱石大・水上たかね・立石了

　所外共同研究者　麓慎一（佛教大学）・岸本覚（鳥取大学）・谷本晃久（北海道大学）・白石烈（宮内庁書陵部）・福元啓介（尚古集成館）

研究の概要

（１）課題の概要

　本所が特殊蒐書として所蔵する維新関係貴重書史料群は、質量ともに国内有数のコレクションでありながら、一部を除き史料学的調査・研究は進展をみていない（デジタルアーカイヴ化も未形成）。本研究では対象史料群のうち、維新史料引継本（約二万冊、戦前期の維新史料編纂会が収集した史料群）・外務省引継書類（約三〇〇〇冊、政府から移管された江戸幕府の外国方関係史料）・史談会本（約二〇〇〇冊、旧華族諸家が複製収集した幕末維新史料群）、また、国宝島津家文書や島津家本のうち、幕末維新関係史料を対象とする。当該時期のそれぞれの地域を専門とする共同研究者を募集し、厳密な史料学的検討を加えつつ、各史料の記述内容を確認して解説目録の作成に着手する。明治維新への社会的関心をも見据えて、本研究の成果を公開し、来たるべきデジタルアーカイヴ化に向けての基礎的作業を実施する。

（２）研究の成果

　論文ほかにより成果を公開した。白石烈「『朝彦親王日記』補遺―文久二年（一八六二）九月四日条～十月八日条、元治元年（一八六四）十月三日条～十二月十五日条―」（『書陵部紀要』、第七三号、二〇二二年三月）は、宮内庁書陵部所蔵の「朝彦親王日記」写本についての翻刻で、紹介の部分（文久二年および元治元年）は初の活字化となる。原本が消失した宮内省編纂事業による謄写本（臨時帝室編修局本）を底本として、維新史料引継本により校訂しており、価値の高い情報を含む。本共同研究で追究してきた、複数所蔵機関にまたがる写本群の検討結果を反映することができた。また白石烈「孝明天皇宸翰と会津松平家―明治天皇への奉呈前後の背景―」（『福島史学研究』、第一〇〇号、二〇二二年三月）では、維新史料引継本や書陵部所蔵の編纂史料を活用することで孝明天皇宸翰の取扱いを検証し、幕末・明治の会津藩および藩主松平家の動向を解明することができた。  
　谷本晃久「蝦夷通詞とアイヌ語地名」（北海道博物館編『北海道博物館第5回特別展「アイヌ語地名と北海道」連続講座・特別フォーラム講演記録』、同館、二〇二一年九月）は、維新史料引継本所収の画像史料を活用したもので、当該史料は「蝦夷通詞」を明確に表示する画像として貴重なものと評価できる。歴博の企画展で展示されるなど、北方史・アイヌ史の貴重な素材となった。なお関連して、麓研究員による谷本晃久『近世蝦夷地在地社会の研究』（山川出版社、二〇二〇年）についての書評も、学会誌に掲載された。